

平成22年度 連絡協力促進事業
「四国ユースフォーラム ワカシ宿から四国発進」

第5回目となる今回、内容もフィールドワークなどを取り入れ、今までとは少し趣を変えたものになりました。また、講演や交流会などを通して、相互の絆をより強くし、自分たちの活動を見直すよい機会となりました。これからも自分たちの地域に誇りを持ち、様々な活動を各地へ発信できるように取り組みたいと思っています。

1. 事業実施までの経緯

本事業は、青年の育成という青少年交流の家（旧青年の家）の原点に立ち戻った事業である。地域を元気づける上で、青年活動の活性化は必要不可欠である。しかし、従来の地域における青年活動の中核を担っていた青年団員数は減少し、その役割も変化してきている。四国各県では、青年団だけでなく、NPO法人や大学のサークルなど、地域おこしや地域文化継承において特徴ある活動をし、地域に貢献している若者もいるが、その若者同士の連携はあまり強くないのが現状である。このような状況において「四国はひとつ」のテーマのもと、地域の活性化のために日頃活動している四国の青年が集まることで、その絆を強くし、四国を担うリーダーを養成していくことが国立施設として取り組むべき課題である。

四国の中核的施設として我がふるさと四国を仲間と一緒に元気づけたい、そんな若者を育てていきたいと四国各県の青年団と連携して事業を展開してきた。平成18年度に始まった本事業は、1年目は高知県青年団協議会、2年目は愛媛県青年団連合会と連携して事業を実施してきた。3年目は、香川県青年連合会に加え、大学生を中心とした事業「プロジェクトY（ユース）」を展開していた香川県教育委員会と連携し事業を作り上げた。4年目は、徳島県青年連合会と連携しながら事業を進め、「4年で四国一周」の当初の目標は達成された。

昨年度の事業後、四国四県青年団の役員、評価委員を務めた四国各県教育委員会の担当者、国立大洲青少年交流の家のスタッフが集まり、評価会を実施した。そんな中、青年活動に刺激と活力をあたえられる場の設定は必要であり、このようなフォーラムの持つ意義が大きいことや、参加者の強い要望もあって、今回の第5回目を実施することとなった。

2. ねらい

地域社会で果たすべき青年団体の役割が、商業サービスの充実や行政が担う分野の拡大等の理由により変化してきている中、四国全県の青年が集い、日頃の活動や地域への思いを語り合う機会を持つことで、今後の活動の活性化につなげるとともに、交流をとおして青年団体相互の連携強化を図る。

- | | |
|--------|---|
| 3. 主 催 | 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家 |
| 4. 共 催 | 四国青年団協議会・高知県青年団協議会・愛媛県青年団連合会
香川県連合青年会・徳島県青年連合会 |
| 5. 後 援 | 高知・愛媛・香川・徳島各県教育委員会・大洲市教育委員会 |
| 6. 期 日 | 平成23年2月19日（土）～20日（日） |
| 7. 場 所 | 高知県立高知青少年の家 |

8. 参加人数 参加者四国に住む18歳以上39歳以下の青年21名（募集人数40名）

9. 講師 藪原 秀樹 氏（株式会社わもん代表取締役）
松田 弦 氏（クラシックギター奏者）

10. 日程

【2月19日（土）】

13:30 14:00

15:00

18:00 19:30

21:00

22:30

受付	開講式	アイスブレイク	藪原 秀樹 氏 「上手な話の聴き方」	夕入 食浴	松田 弦 氏 「聴く実践」	情報交換会	就 寝
----	-----	---------	-----------------------	----------	------------------	-------	--------

【2月20日（日）】

7:30 8:00 9:00

12:00

13:00

起 床	準出 備発	朝 食	フィールドワーク 「現地で聴こう」	昼 食	閉講式 ふりかえり	評価会
--------	----------	--------	----------------------	--------	--------------	-----

11. 活動内容

【第1日 2月19日（土）】

「アイスブレイク」（14:00～15:00）

仲間との交流を図るため、高知県青年団協議会の運営で「アイスブレイク」を行った。ほとんどが顔を知っている参加者であったため、身体を動かしながら楽しめる内容のものを実施した。3つのポーズを使った後出しジャンケンや2人組で勝負するもの、3人組でジャンケンをして3人分の指の数を足し算したり掛け算（掛け算のとき、「グー」は1として計算）したりしてスピードを競うものなど、参加者全員がゲームを楽しんだ。



「講演 ～上手な話の聴き方～」 藪原 秀樹 氏（15:00～18:00）



講師に徳島県出身の株式会社わもん代表取締役、藪原秀樹氏の講演が行われた。「上手な話の聴き方」を言い換え「すべらない話の聴き方」と題して体感型の研修を実施。参加者一同が、話し手の「声なき声」に耳を傾け、互いの心を共鳴させながら、真の課題や問題にアプローチしていく。話し手の存在そのものに、絶大な敬意を払うこと、絶対尊敬の姿勢を持って、相手に接することその過程は、聴き手自らの修養となり、集中力や理解力、コミュニケーション力を向上させる場となる。他人の話聴き逃したり、聴き流したりしてしまうことがあるが、これは聴き手が未熟な場合に起こると考えられる。「どうして話してくれないのか。」と相手を責める前に、自らが「聴く力」を身につけることが大事なのである。聴くコツは自分の考えを押しつけないこと。「聴く」ことについて0ヘルツ（人には聞こえない音）にチューニングを合わせ、相手の声のトーン調子に注意することが大事である。その姿勢は、やがて自分自身に返ってくることに

なる。

藪原氏は、40代で東洋哲学と西洋哲学を融合させた「わもん（聞くことによる自己修養法）」を完成させた。相手の話にただただ耳を傾け、その存在をまるごと魂で受け止める姿勢が、多くの人々に感動と勇気を与えている。わもんを学ぶことにより、深いレベルで、自らの心の声に耳を傾ける力が身に付き、自分自身の潜在能力が発揮されていくのである。

相手の「言葉」ではなく「感情」を感じ取ることができると、聴き手と話し手の「共鳴」が始まる。藪原氏は、相手の話を理解するだけでなく、「こころ」を理解することを大切にしている。講演を聴いた参加者は、聞く力に潜む「無限の可能性」を実感したことであろう。



「講演 ～クラシックギター演奏～」 松田 弦氏 (19:30～21:00)



夜の講演では、高知県黒潮町（大方）出身の松田 弦氏によるクラシックギター演奏を聴いた。高知市の高校進学を機に、16才からクラシックギターを始め、今までに国内外のコンクールで数々の賞を受賞している。現在も日本各地を始め、オーストラリア、ドイツ、タイなどでもリサイタルを行っており、高知県下の小中学校等でもクラシックギターの魅力を伝える為の演奏に努めている。

松田氏の生演奏を間近で聴くことができるのも、今回の事業のよいところである。クラシックギターから奏でられるやさしい音色や素晴らしいテクニックなど、参加者を魅了させた。また、いろいろなエピソードなども交えながら、クラシックギターをはじめたきっかけやこれからやりたいことなどを語ってくれた。四国（高知）から世界に発信している松田氏には、参加者も元気ももらったようである。

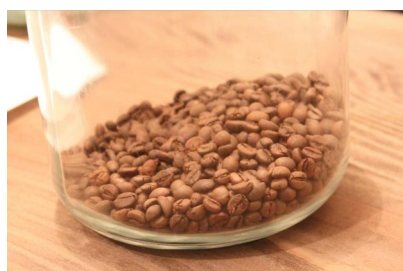
「情報交換会」 (21:00～)

1日目の最後の時間は、リラックスした時間を過ごした。参加者・スタッフに加え、講師の方や事業評価委員の方も交えて、自分たちの活動のことや青年団体の将来のことなど、自由に情報交換をした。自分たちが日頃考えていることを本音で語り合える貴重な時間となった。



【第2日 2月20日（日）】

「フィールドワーク（ジャングル育ちコーヒー店 光の種）」 (9:00～12:00)



今回の事業では今までと違い、「フィールドワーク」を取り入れた。地元の元気な企業を訪ねて、いろいろな話を聴こうという取り組みで、場所は高知県青年団協議会の紹介で、タイのジャングルの中で育った大自然の野生コーヒー豆から焙煎したコーヒーを提供している店「光の種」である。”「やわらかアタマ」をつくる食習慣のはなし”や”光の種と食の流通についてはなし”など、オーナーが店を始めるきっかけや思いなどを語ってくれた。休憩の間には、” コーヒーブレイク”の時間もあり、話題のコーヒーをいただいた。現在、農薬や化学肥料が使用されている食品作物が非常に多いが、そういったものを一切使用せず、飲む人の体の健康につながり、現地の人たちの健康や生活も考えたコーヒーを提供し、世界に発信するオーナーの思いに、参加者も共感していた。後半は、「幸せ」をどうやってつくっていくかという内容でワークショップを実施した。3人組になっての自己紹介から始まり、自分の未来の姿・将来像についても触れたりしながら、他人の話を「聴く」だけでなく、聴い

たことをさらに深め、「語る」ことにも展開させていった。「聴く」を柱とした内容で、わずか3時間のフィールドワークであったが、参加者全員が勇気をもらい、心が温かくなるような時間を過ごすことができた。

「評価会」（事業終了後）

関係者の意見を反映させ、今後の事業に生かすために、四国四県青年団の役員、評価委員を務めた高知・愛媛・香川県教育委員会の担当者、国立大洲青少年交流の家のスタッフが集まり、評価会を実施した。内容についてもいろいろな感想や意見が出されたが、“四国の青年が集う”というねらいからすると、参加者の少なさは誰もが残念に感じていたことだった。来年度の継続については検討課題としたが、青年団からは「来年度以降もぜひ続けてほしい。青年の出会い・交流の場としてお願いしたい。」との意見があった。そういった青年の思いも大切にしながら、国立大洲青少年交流の家と四国四県の青年団とが、ともに前進できる方法を模索していきたい。

1 2. 参加者の声

参加者の事後アンケート結果を以下に示す。

* 満足：62.5% * やや満足：31.3% * やや不満：6.3% * 不満：0.0%

- あたたかく、やさしい雰囲気でもよかった。
- 内容がすばらしい。講師の方の場の雰囲気作りがすばらしい。
- 自分自身が参加して良かったので、周りの人にももっと声をかけるべきだった。この目的が個人のコミュニケーションアップなら、もっと良い成果は得られたと思います。
- 自分のことを見つめ直すことができたと思います。みんなからパワーをもらいました。
- 「完全沈黙」の難しさを体感できた。いろんな人と関わることが多いので、自分の尺度で話を聞かず、同じ目線になれる人になりたいと思った。
- 人が少なすぎる。周知、広報活動をもっとすればよい。
- 事業自体には問題なかったが、この事業を四国という単位でやる意味が参加して見いだせなかった。
- せっかくのよいイベントなのに、参加者が少なかった。四国といえど、県内の若者にもっと呼びかけるべきだった。

1 3. 成果と課題

5年目となった本事業であるが、4年で四国一周し、2巡目は今までの内容と少し違ったものになっている。昨年度の課題でもあった本事業のプログラム内容については、今回の幹事県である高知県青年団協議会と打ち合わせを実施。1日目に青年団員の研修の場を設定し、2日目に交流を図ることのできるプログラムを取り入れた。例年行っていた“四国四県からの発信”に替わり、“フィールドワーク”と“クラシックギター演奏”を取り入れた。これは、地元高知から、各地へ発信・活動している企業や若者の姿や思いを伝えなかったというのが第一の理由である。夢や目標を持って頑張っている姿に、参加者も何かを感じ取ってくれたことと思う。また、評価委員として派遣された高知・愛媛・香川県教育委員会の方からは、様々な場面で気づいたことをアドバイスしてもらするなど、青年団にとって良い機会となり、事業に関しても深まりのあるものとなった。とくに夜の情報交換会では、講師や教育委員会の方も含め、日頃の自分たちの活動について語り合った。こういった、何でも言い合える時間を共に過ごすことが、相手のことを理解したり、自分自身を見つめ直すきっかけにもなるに違いない。

今回の「四国ユースフォーラム」では、有意義な研修ができたが、参加者21名という結果になってしまった。今年も、各県からの取り組み発表という形を無くしたために例年より減少したとも考えられるが、逆にこれが現段階での、本事業の純粋な参加者とも受け取れる。“青年団”という枠にとらわれず、もっとオープンにした事業を展開できるよう進めていかねばならない。これからも各団体との連携を保ちつつ、未来を支える若者たちにエールを送りたい。